

研究倫理に即した不正事例の類型化

リスク工学専攻 岡部廣大 金惟黙 元田卓

アドバイザー教員：遠藤 靖典 教授

たデータからそれぞれの事例の類型化を行った。

1. はじめに

我々が研究活動を行う上で研究倫理とは必ず守らなくてはならないものである。しかしながら、この研究倫理を破る行為である研究不正の事例は後を絶たない現状が存在している。そもそも研究不正とはどういったものがあるのだろうか。日本で有名になった事例として2014年に起きたSTAP細胞問題というものがある。この事例は理研に所属している小保方晴子氏らが英科学誌ネイチャーに発表したSTAP細胞という新型万能細胞の存在を明らかにしたことからはじまった。これまでに発表された万能細胞であるES細胞やiPS細胞と異なり、STAP細胞は胎盤への分化能を持つということで再生医療などへの貢献を期待された。しかしその後、STAP細胞の論文に不自然な点があるとの指摘が外部から寄せられ、調査が行われたところ、遺伝子解析の画像に切り貼りのあとが見られたこと、博士論文のものと酷似した画像があることがわかった。この二点に関して研究不正の分類として「改ざん」と「ねつ造」があったといえる。研究不正が発覚したのちこの論文は撤回された。このような研究不正は当然犯してはならないものであるが、一体なぜ起きてしまったのかという原因については公表されておらず、多くの人々が疑問に思うところである。

そこで本研究では、研究不正が起きてしまう原因についての調査を行い、得られ

2. 定義

1 ここでまず、研究不正がどういったものであるのか、そして、研究倫理の定義について言及する。研究不正に関する先行研究として早稲田大学院の研究倫理順守マニュアル [?] を取り上げる。この中には不正な手段に依る研究、つまり「公正さ」「公共性」「人権」に対する配慮を欠いた研究は社会に悪影響を及ぼし、社会的信頼の損失へと導いてしまうもので、研究倫理とは順守しなければならない研究活動上の倫理的原則であり、研究倫理を順守することは研究従事者の社会的責任であるとしている。つまり、研究不正は社会に悪影響を及ぼし、社会的信頼の損失につながってしまうため、この研究倫理を順守することで研究不正を防止できるものであると私たちは解釈した。この研究不正の定義を厳密に定めるために、まず研究倫理についての定義を行った。私たちはこの研究倫理の定義にあたり、倫理についてを定義することから研究倫理を定義することにした。

2.1. 倫理とは

倫理を考える際に似た言葉として社会規範というものがある。この社会規範を破る行為について考えると、盗難や殺人といった、罪に該当するようなものが挙げられる。盗難や殺人が常習化したような社

会というのはそれはもはや社会とは言えず、野生と同じであるといえるだろう。そういったことから、社会規範とは守らなくては社会そのものが成り立たなくなってしまうものであるといえる。では倫理と社会規範の違いとはどういったものであろうか。それは、倫理というのはその規範の考え方が人々の間でならされていったものであると考えた。そこで私たちは倫理を社会規範に基づいた人々の統一された価値観と定義した。

2.2. 研究倫理と研究不正

倫理を上記のように定義し、研究という言葉をつけて研究倫理を表すと、研究規範に基づいた研究者たちの統一された科学への価値観であると定めることができる。つまり、守らなくては科学が成り立たないと研究者たちが思っているものである。以上のように定義すれば、前述の先行研究として挙げたものの中で定義されていた研究不正は公正さ、公共性、人権に対する配慮の欠いたものであるということと何ら矛盾もない。

ここで、研究不正の原因についてどのような型があるかについて過去の事例を述べる。黒木登志夫氏が学術フォーラムで研究不正という内容で発表した資料 [?] によると、研究不正の原因にはトップダウン式のものと同ボトムアップ式のものがあるとしている。黒木氏はこのうちトップダウン式の研究不正を東大分生研で起きた研究不正の事例とともに説明している。その事例では研究室の教授である加藤茂明氏が研究室で国際的に著名な学術雑誌への論文掲載を過度に重視していたという背景があり、研究室の大学院生に強圧的な指示、指導が長期にわたって常態化していたようである。そのような背景から

大学院生が不正に手を染めていってしまうという事例である。このように教授のプレッシャーが原因となって起こってしまった研究不正をトップダウン式と呼んでいる。この研究のように、過去の事例を調査することでそこから見えてくる型を考察することを本研究の目的とした。

3. 調査方法

2017年9月現在で文部科学省ホームページに記載されている研究活動において特定不正行為が認定された事案19件を元に、その他文献やインターネット上の公開情報により情報の保管を行いデータベースを作成した。作成したデータベースから研究不正を行った研究者、研究内容から研究不正の原因の考察を行った。

4. 結果

私たちが調査を行った事例19件について、不正研究の種類別累計を図1に、不正研究を行った研究者の役職内訳を図2に、研究不正のあった分野内訳を図3に示す。

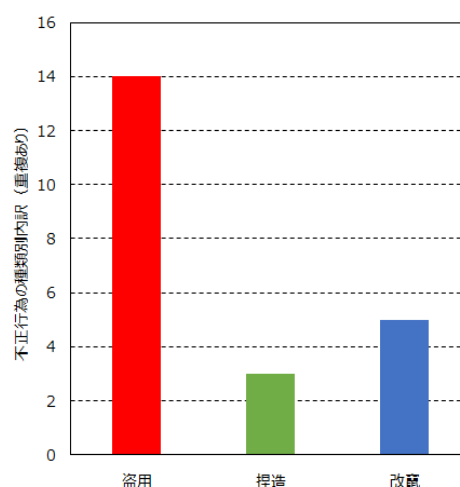


図1 不正研究の種類別累計

いる者が多く、保健や社会科学、教育など研究の成果次第で金銭のやり取りの大きいものが割合として多くなった。

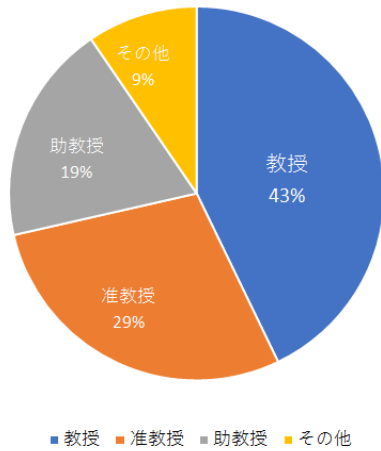


図2 不正研究を行った研究者の役職内訳

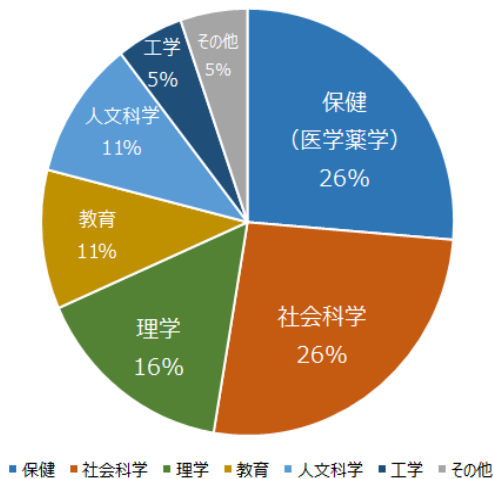


図3 不正研究のあった分野内訳

図2におけるその他については大学院の学芸員と大学に所属していた学術研究院である。本研究で調査した事例の中では図1のとおり盗用が非常に大きな割合を占めていた。また、図2、図3から、不正研究を行った研究者には教授に就いて

5. 考察

調査の結果から、公に研究不正の発生原因としているのはほぼ二つに分けられ、最も多かったものは研究倫理の認知の低さや、研究への正確さ、厳密さの認識の欠如によるものである。そして、数は少ないものの、業績至上主義の考えや論文の提出締め切りによる焦りが引き起こした、研究の成果を早く出さなくてはならない状況が原因となったものがあった。しかし、これらは公にされている情報であり、公表はできないものが原因となる研究不正があるのではないかと考え、その推測を行った。そして私たちは金銭による圧力が研究不正を行う原因の一つであると推測した。研究を行う上で金銭というのはなくてはならないものであり、全くの援助を受けずに研究を続けていくのは困難なものである。研究にまつわる経費として科研費や各研究プロジェクトから援助される経費などがあるが、これらの経費をもらっている以上成果を出さなければならないという使命感を研究者たちは感じるのではないかと考えた。研究費補助機関データベース管理システム UMIN[?] によれば、医療の分野で一つの団体から一件の研究課題で受け取れる補助金は100万から1000万円にもなり、多額の費用がかかればかかるほど圧力というのは大きくなるであろう。金銭による圧力からであると推測できる例に琉球大学の微生物学、腫瘍学の分野での事例がある。この研究不正は当時教授として琉球大学に務めていた森直樹氏、岩政輝男氏らによる捏造および改竄である。この研究不正の発生要

因として、公的には、研究成果の先陣争いや研究費を獲得し続けるために論文成果を早く出すという業績至上主義の考えがあったということ、実験データ及び実験ノートは研究グループで共有された知的財産であるため研究室から発表される論文間で無断使用しても問題がないとの考えがあったことなどが理由となっている。しかし、この研究不正の認定理由にデータの使いまわしを行ったこと、省略した実験を実施したかのように装ったことが挙げられており、これを研究不正への認識の欠如とするのはやや不自然であると考えられる。この研究では経費として科学研究費補助金、重点地域研究開発推進プログラム、地域結集型共同研究事業、地域イノベーション創出総合支援事業等から研究経費を受け取っていたとされ、11の研究課題を対象に総額5240万円もの研究費を受け取った可能性があり、このような多額の金銭による圧力が研究不正を引き起こした原因の一つと推測した。このような複数の団体から援助を受けていた研究不正の例が散見されたため、私たちは金銭による圧力が引き起こす型が研究不正にあると考えた。

6. 終わりに

本研究では研究不正の類型化を行ったが、研究不正の再発への防止対策として役立てられると考えている。本研究で見つかった型について、研究不正、研究倫理の認識の欠如によるものは各大学、研究機関の研究倫理教育を行っていくこと、研究成果と金銭による圧力が引き起こすものは研究不正を行うことのリスクを研究者に幅広く認知させていくことなどが挙げられる。

また本研究をより発展させていくため

にはより多くの事例を調査し、各型の妥当性を検証していく必要であろう。

参考文献

- [1] 早稲田大学大学院政治学研究科、早稲田大学大学院公共経営研究科；研究倫理順守マニュアル,2014.1
- [2] 研究不正 Scientific Misconducts - 日本学術振興会 https://www.jsps.go.jp/j-kousei/data/2015_3.pdf
- [3] 文部科学省の予算の配分又は措置により行われる研究活動において特定不正行為が認定された事案(一覧) http://www.mext.go.jp/a_menu/jinzai/fusei/1360839.html
- [4] 研究費補助機関データベース管理システム - UMIN https://center6.umin.ac.jp/cgi-open-bin/josei/select/index.cgi?serv=jlist&func=search&nendo=now&order=end_date